被災地の未だ消えない瓦礫の山。それでも復興への様々な活動の明るいニュースも聞こえてきます。
現地からは種々の支援要請が届きますが、全てに応えられない苦悩があります。
一人は無力でも、力を合わせればできる。復興も、支援も。未曾有の大震災を経験して私たちが得た確信です。

ビラーン通信
66号

2011年7月25日発行

NPO法人ビラーンの医療と自立を支える会
（英文名略称・ＨＡＮＤＳ）
本部：〒227-0033 横浜市青葉区鴨志田町516-11
TEL:045-962-0824 FAX:045-962-1933
E-mail: hands-ty@r07.itscom.net
http://homepage3.nifty.com/hands/
郵便振替口座　00210-5-72693
（加入者名）ビラーンの医療と自立を支える会

ここに一本の橋があれば･･･

私たちが関わる山の村はほとんどが、道路事情が悪い辺境にあります。特に雨季には四駆でも立ち往生してしまいます。中でもキアミは、ジェネラルサントス市から直線距離 25ｋｍ程度にも関わらず、橋のない一本の川(蛇行するBig Lun川)を何回も渡らなければならないので、天候が急変して増水したりすると、途中の民家に泊めてもらって水位が下がるのを待つことになります。

そのキアミに向けてナブル小学校の開校式のため、５月31日の朝９時、私たちはジェネラルサントス市内のCMIP本部を出発しました。時に日が差すまずまずの天候でした。ICECKの皆さん（関連記事P5)、神父、教師、カレッジ奨学生、迎えの村人他総勢40名が食材や大なべと一緒にトラック2台に分乗しました。サランガニ湾にそって国道を1時間ほど南下したあと、左に曲がるとまもなく未舗装の山道に入りました。前回と違って、キアミのあるキナム・バランガイの手前、ダーンスヤン・バランガイまでは橋ができていました。30数回といわれていた橋のない川の渡河は20回余りに減りましたが、水位は昼前に降り出した雨でどんどん上がっています。短時間の降雨ですぐ水位が増加するのは、ここでは流域面積が狭いのも理由ですが、やはり森が消えて山の保水力がなくなったのが主な原因でしょう。

ドライバーと助手たちの懸命な働きで、2時頃にキナム・バランガイの中心集落キナムに到着しました。川一本渡ればキアミという地点です。ここでトラックを降りた私たちは小雨の中、キアミに向かって30分ほど歩き大きな川に出ました。対岸には、キアミで開校式を迎えるため早朝ナブルを発って、私たちの到着を待っている子どもたちの姿が見えました。しかし、とても渡れる状況ではありません。キアミを目の前にして私たちは一旦キナムに戻りました。

一夜明けた６月１日早朝、腰あたりまで水位が下がった川を渡り、待ちかねたナブルの子どもたちの歓迎の歌と挨拶を受けました。その日は開校式のあと夕暮れ近くまでゲーム等で交流を楽しみました。

２日の朝、ナブルの子どもたちは付き添いの父母、ゴンサロ先生と再び４時間かけてナブル村に戻って行きました。CMIP関係者と私たちは、トラックが使えるとの情報に11時頃まで待機しましたが、結局ダメで、キナムで借りた馬５頭で20回余り濁流を渡り(写真)、夕方５時頃CMIP本部に帰着しました。大変な行程でしたが、これは村人と馬には日常なのだと信頼することで、乗り切ることができました。

キナムには、村役場のほか、公立の小学校とハイスクール、週１回助産師が詰めるヘルスセンター等があります。このキナムとキアミを隔てる一本の川に橋ができれば、CMIP運営のキアミ小(4年生まで)を修了してキナム公立小に通う5、6年生の雨期の通学も安全です。CMIPも橋建設は地方政府にずっと要請していますが、未だよい返事はもらえていないようです。

今回のキアミ訪問では、CMIPの指導で始まったキュウリやオクラ、ピーナッツなどの換金作物栽培の畑もみました。バランガイ・キナムの中心集落キナムにつながる橋は、このキアミの野菜を市場につなぐ道にもなるはずです。　（山崎）